

サビエル生誕五百年



巡礼の道

73

藤屋 侃士  
(下松市幸ヶ丘)

## 日本史を書いた神父

「ルイス・フロイス、日本とポルトガル、その出会いの歴史をここに長崎の地で書いた」。

長崎市西坂にある日本二十六聖人記念碑。すぐ近くに「日本史」を書いたルイス・フロイスの石碑があり、この文章が刻まれている。

フロイスは一五三二年にポルトガルのリスボンで生まれ、十六歳の時にイエズス会に入り、インドのゴアに渡った。

そこで日本に向かう

直前のサビエルとヤジローに出会ったが、この出会いが彼を日本に向かわせることとなり、サビエル来日から十四年後の一五六三年に来日した。

一五九七年、長崎で病死するが、優れた語学力と文筆の才能を生かし、数々の著作を残した。中でも「日本史」はヨーロッパに日本を紹介しただけでなく、日本の戦国時代を知る資料としても高く評価されている。

ところがNHKの大河ドラマ「黄金の日々」で、フロイス役を演じたカンガス神父と出会い、フロイスを身近に感じるようになった。

カンガス神父は東京のイグナチオ教会で三十年以上活躍され、今春、山口教会に赴任し

て来られた。人との出会いが新しい出会いへと発展するものであり、出会いを大切にすることが人生を豊かにしてくれると実感する。

さて、天正少年使節の中浦ジュリアンの生誕地を訪ねて先日、長崎を旅した。そこでもなぜ、南蛮船がこん

日本の殉教史研究の第一人者、長崎の二十六聖人記念館の結城了悟神父を何度か訪ね、そのつどフロイスの石碑を見ていたのに、これまで気にも留めなかった。



フロイスが上陸した横瀬浦港  
|| 手前中央にフロイス像が見える

な港に入港したのだろうと思うほど田舎の小さな港である。ジュリアンの生地と車で十分も離れていない。フロイスがこの地を離れ、京都に向かって四年後にジュリアンが生まれているから、幼少のころ、フロイスのことを知っていたのではないかと想像する。八年余の旅を終えて帰国した天正少年使節団は秀吉に謁見した。この時、フロイスも立ち会っている。つまりフロイスとジュリアンは実際に出会っているのだ。

歴史をひもとくときまざまな出会いと遭遇

（元山口放送取締役ラジオ局長）



西海歴史民俗資料館のフロイス像